

ちがさきの、 海物語。

茅ヶ崎の海とくれば、陽光燦々、サーフィンをはじめとするマリンスポーツ、サザンサウンドのイメージが広く知られています。でも、この海はそれだけではありません。豊かな「相模湾の幸」が上がる漁場です。湘南地方では唯一である、海のとりのキャンプ場があります。名勝えぼし岩をめぐる船が出ています。そしてなにより、この海辺の温暖で清澄な空気は、人びとの癒しやリセットにかけがえのない時間を提供してきました。

まっしろい稚魚 しらす

しらすは、カタクチイワシ・マイワシ・イカナゴ・ウナギ・アユ・ニシンなど、からだに色素がなく白い稚魚の総称です。茅ヶ崎名物の「しらす丼」など、積極的に食用とされるものは、おもにカタクチイワシの稚魚。身がしっかりしているのも特徴で、口先が上あごだけ突出しています。

しらすは、川のある沿岸海域でよく獲れます。川の流入するところは

汽水域といって、塩分が薄まり、たくさんの動物性プランクトンが発生します。それを食べるために稚魚たちが群れとなって集まってくる。生態系の構図です。

しらす漁の網にかかってくるなかには、タコやイカの幼生やエビやカニのゾエア幼生(動物性プランクトンの一種)なども混じっていることもあります。海から上がる網を眺

めると、そんな景色も見られます。

釜揚げ、しらす干し、ちりめん、と名前が変わるのは水分含有量のちがいです。茹で上げたあと、水切り程度で製品になるのが「釜揚げ」(水分含有量85%前後)、50～60%ほどに感想されたものが「しらす干し」、25～35%ほどに乾燥させたものが「ちりめん」。



海のとりの松林
柳島キャンプ場

湘南を代表する景勝地、江の島が大正12年(1923)の関東大震災で隆起した陸繋島であるのはよく知られていますが、茅ヶ崎市南西部にも小さな陸繋島があります。柳島です。

相模川河口左岸側にある柳島は、以前は相模川の分流や小出川によって分断されていましたが、江の島同様、関東大震災で隆起して陸続きとなりました。

この柳島に、「海辺のとりのキャンプ場」として平成24年(2012)オープンしたのが柳島キャンプ場です。

松林に囲まれたさわやかな一角、その松林をふっと抜けると眼前に広がる地平線。沖には、おもむきある形でたたずむえぼし岩、東に緑の江の島、西に富士。ぜいたくなキャンプ時間です。

さがみ縦貫道の開通で、いっそうアクセスがよくなったから車でさっと訪れる非日常空間。身軽な格好で電車で訪れるのも

一興。柳島キャンプ場の特徴のひとつは、レンタル用品が豊富ということだからです。

テント、タープ、寝袋、マット、ランタンなどの基本用品はもちろん、調理小物や食器セット、鍋類、飯盒、ダッチオーブンまで揃っています。

仲間どうしのキャンプはもとより、お子さま連れのファミリーキャンプにもふさわしい気軽さが好評です。

魂の詩人
八木重吉

そんなにひろくない路で
ずっと海の方へつづいていて
てんきぐあいいも こんなにいいなら
こんなみちをいつまでもあるいていたい
りょうがわには
しばくさがかれかかっており
みちのすえには 海がねむっている
いきどおりをもつもの
ゆくべきみちではない

(八木重吉『寂寥三昧』より)

茅ヶ崎にかつて南湖院という東洋一の規模をもつサナトリウム(結核療養所)がありました。療養に適したという茅ヶ崎の風土のあかしのひとつともいえます。

医師高田畊安によって明治32年(1899)に開院されたものですが、終戦直前の昭和20年(1945)5月、海軍に全面接収され解散となりました。ひところは、東京の医学生の間でほとんどが卒業必修単位のように見学に訪れたとの逸話が残っています。

魂の詩人八木重吉(1898-1927)もここで療養した一人でした。生まれたのは東京府南多摩郡堺村(現在の東京都町田市相原町)。神奈川県師範学校在学時より教会に通いだすようになり、洗礼を受けます。25歳のとき18歳の島田とみと結婚。このころには短歌や詩を精力

的に書いていました。

29歳のとき、結核を発症。茅ヶ崎南湖院で療養生活に入ります。病臥のなか第二詩集『貧しき信徒』を書き上げますが、上梓するに至らないまま30歳の短い生命を終えます。詩作生活は5年間ほどでしたが、2000を超えるという膨大な詩篇が遺されました。

詩人でもあり彫刻家でもあった高村光太郎はこう述べています。(「八木重吉詩集」彌生書房)

この清い、心のしたたりのやうな詩は、いかなる世代の中にあっても死なない。詩の技法がいかやうに変化する時が来ても生きて読む人の心をうつに違ひない。

それほどこれらの詩は詩人の心のいちばん奥の、ほんとの中核のものだけが捉へられ、抒べられてゐるのである。